

164
658

小夜中山鐘由來脚本
上の巻

088569-000-8

特52-597

小夜中山鐘由來 上の巻

近松 半二/原著

M27

DBJ-0228



小夜中山鐘由來脚本上の巻

一 故 近 松 半 二 原 作
岡 野 美 春 補 綴



田 上 平 馬
關 源 内
親 掌 人
使 丁 二 人

本舞臺一面平舞臺通り高擧上手に門あり總て大内御門前の休幕の内より仕丁二人竹
箆を持ち掃除をまて居此之人二挺鼓の調らべにて幕あく

「けふは若宮は安産のれたてた

「道付けお能かはしまるやら鼓のしらへ太鼓の音

「月花を樂しみに歌をよみ

「世を安樂に暮つる境界と

「こちどちか身の上とはうんてんばんてん

「ナントア山しい事しやないかいの

「何のやいゴリヤ其様に羨むか結句上程苦か多いか

「なる程こちどちは其身其儘

「氣樂に暮らすの淨世の徳じや

「夫もそうかい及はぬ咄しは最れいて

「休息所て一休み

「サアいこふわい ト二人は門内へ這入る此内向ふより秋葉中將冠裝束に
て出来る續いて後室眞鹿は前出來り花道にて

「コレハ中將様お久しふりてひきたんよいか顔を拜し此様な嬉しい事ハム
りませぬ

「ホ、花園の後室眞鹿は前久々にて無事の對面承り度義もあれとこ、は途中

「左様なれは門前まで

「然らば同道致しやさん

「サアお出て遊しませ ト二人の舞臺へ來りよき處に住ふ

「此度桂川家に於て息所の縁組定め公家武家の分ちなく眉目よき娘を繪に寫
させ差上へしと仰渡さる就中其許の息女照田姫美人の聞へ隠れおし去るによ
つて先達て使者をさし越し其繪姿を望みしる定めて用意や召せれつらん

「コレハ有かたされ詞田舎育ちのふ、つら娘大内の嫁君撰のその數に加へ
らるゝえ冥加に叶ふ家の面目是も偏に中將様のね取おし有かたう存し舛る

「レテ其繪姿は

「ハイ兼て繪所へ付置しか夜前出來致せし故直様差上し其様子をあまた様の
れ耳へ入んとれ館へ参りしか早御参内と承りこれへ参りしは右の禮もや上

度その外もちと密々に頼す願ひもあれと夫は後様なふのお能拜見も致し
度何やら角から取交て憚もへり見すれ跡を慕ひ参り升る

「ホ、照田姫の姿繪畫所よりさしわけしどは重疊く外の様子は又重ねてアノ

笛のしらへはれ能の刻限イサ門内へ

真「左様おれは仰に随ひお能拜見おえりし様は又後程

中「先夫までは

真「お別尋や升る

ト真鹿は門内へ這入る

小夜中山鐘由來脚本上の巻終

明治廿七年五月廿一日印刷
全 廿七年五月廿五日發行

(定價五錢)

大阪府西成郡曾根崎村番外拾八番屋敷

著作 兼發行者 岡野美春

大阪市西區江戸堀南通四丁目四十五番屋敷

發行者 植木嘉七

版權
興行權
所有

大阪市北區堂島裏壹丁目百拾八番屋敷

印刷者 三盛堂 鈴木千代三

